

院友学芸員

2011 NO. 4



國學院大學博物館学研究室

巻頭言

聖徳大学川並記念図書館副館長

椎名 仙卓（しいな のりたか） 61期史



「院友学芸員」第4号の発行をお祝い申し上げます。

昭和26年に博物館法が公布されてから、あと1年で60年になろうとしております。人であれば還暦を迎える頃ですが、この法により学芸員の養成は組織的に推進されてまいりました。國學院大學の博物館学講座は樋口清之先生のご努力で昭和33年に開講され、その後加藤有次先生、青木豊先生へと引き継がれ、やがて53年になろうとしております。学芸員養成大学としては堅実であり、資格取得者は全国の博物館施設で活躍されておられご同慶のいたりです。さらに平成21年度には、博物館学教育研究情報センターが開設され、高度な大学院教育での博物館専門職員の養成が注目され、これからの博物館学の発展に大きな期待が寄せられております。

博物館法の成立は、戦後の民主主義社会が形成される過程の中で、博物館の設置及び運営に関する必要な事項を定め、その健全な発達を促すことにありました。内容的には、博物館は教育委員会の所管に属することを明確にしたり、「博物館協議会」を設けて民主的な運営を促進させたり、また専門的な職員制度を確立した事などであります。これにより法施行規則で学芸員養成方法などを定めましたが、資格取得の主流はやはり大学における博物館学の受講になります。施行当初の科目は、博物館学4単位、教育原理1単位、社会教育概論1単位、視聴覚教育1単位、博物館実習3単位となっておりました。しかし、資格取得の講義内容も社会情勢の変化に応じて改正され、現在は8科目12単位、2年後にはさらに9科目19単位となり、博物館資料保存論、同展示論、同教育論などが加味されます。

こうした改正がなされる時に常に俎上にのぼるのが「博物館史」であります。博物館学を理解する為には、その基となる博物館史を知ることが必要です。加藤有次先生はかつて博物館史の重要性を考え、院友学芸員に都道府県ごとに執筆してもらい1冊にまとめる構想を提示しました。手始めに國學院の博物館学紀要に完成したものから順次掲載しておりましたが、先生の他界により中断するに至りました。何か心残りではありません。

院友学芸員の皆様、博物館に一生を捧げるとなれば、その地域の博物館史に精通することが何よりも大切です。目先の利益で功をあせる必要はありません。“文献に親しみ”将来を見極めることです。明治草創期の國學院では国学的事業として古事類苑の編纂に大きく貢献しています。そこには“文献を理解する”という偉大な精神が流れています。博物館界では昭和の初めから博物館事業促進会による「博物館研究」が刊行され今なお続いています。時代に即した情報・文献が満載されています。座右の雑誌とすべきでしょう。

甲冑の展示

東京国立博物館上席研究員

池田 宏 (いけだ ひろし) 86期史・87神専攻・90博前史



東京国立博物館で甲冑・刀剣などの武器武具の展示を担当して20年を越えた。甲冑は、鎧掛や具足掛と呼ぶ台に甲を掛け、冑をのせて、籠手などの付属品を取り付けて展示する。実際に着る際に使った紐などは、傷んでいる場合がほとんどで、補強の紐を別につけたり、無理な力がかかって作品を傷めないように注意を払う。冑・胴のわずかな傾きや、前後左右のバランスなどの飾り方で、勇ましく威厳に満ちた武士にも、疲れた落ち武者のようにもみえる。籠手の手甲の置き方、脛当の左右の間隔でも、印象は随分異なる。展示の高さも、高くして見上げると堂々とした姿に見えるが、冑などは高すぎて見えづらくなり、逆に低くすると迫力がなくなってしまう。現在、博物館では、床から65～70cmのケースの中に展示をしている。未だに満足のゆく展示となることは少ない。館外での作業となると、甲冑の保存状況や破損の程度に応じて、さらに手当てが必要となったり、展示ケース内が狭く微調整に苦勞する場合も多い。また写真撮影の場合の飾り方は、記録として残ることを考えると更に厳しく、出来上がった写真をみて、幾度となく後悔をした。甲冑の調査は、材質や技法が皮革、組紐、鉄、銅、漆、布帛などの各分野におよぶので幅広い知識が要求される。最近では、デジタルカメラで記録が簡単になったが、具足櫃に入れて保管されていた場合、1つ1つ取り出して拝見の後、元通りに収めるのに、思いがけず時間を費やすこともあった。

卒業論文は、鈴木敬三先生に御指導をいただいた。旧図書館の2階の研究室に毎週お邪魔し、毎回緊張しながらお話をうかがった。甲冑をテーマに卒業論文をみていただくことになり、厚かましく甲冑の調査に行きたいと申し上げると、「甲冑は各部分を紐で結んで組み立てられているのだから、取扱に習熟して、すべての紐を解いて、元通り結んで組み立てられるようになるまで、拝見にうかがうものではない。」と厳しくおっしゃった。困り果てて、先生が調査に行かれる際に、お供させていたきたいと何度かお願いをするうち、丁度久能山東照宮

の徳川家歴代の甲冑の調査をおこなっているのので、東照宮の御許可が得られれば、同行してよいといってください、御許可を得て夏休み、春休みの調査に参加させていただいた。久能山東照宮博物館では、御宝物の甲冑を前に、先生から形や部分名称、材質・技法などについてうかがうことができた。当時の松浦國男宮司、学芸員の小林明、清水実両氏の寛大な御配慮のおかげである。撮影の際、先生はカメラアングルまで細かく指示をされた。その後、國學院高等学校や国立歴史民俗博物館での写真撮影や調査にもお手伝いをさせていただく機会に恵まれ、どうにか甲冑の取扱いができるようになったが、展示の度にいつも蘇る大切な思い出である。



展示作業中

埋蔵文化財から博物館へ 学芸員としての19年間

元茨城県立歴史館学芸員

佐藤 正好 (さとう まさよし) 78期史



平成3年茨城県立歴史館に赴任し、学芸員としての第一歩を歩み始めた。それまでの20年間、埋蔵文化財での調整・調査の仕事からの職種替えは大変な決断と不安を感じ得たことは昨日のことにように思い出される。

赴任しての仕事は既に進められていた、茨城県立歴史館常設展示リニューアルを含めた増設改修の考古・中世部門の担当で、翌年10月新規オープン迄の展示構成・資料収集・レプリカ作製の交渉・製作、文字・写真パネル等作制であり、休日をも返上しての仕事であった。この時の苦しい中での仕事で展示とは何かということを学び、いろいろな分野の方々との「出会い」で博物館とは「なんぞや」を学ばせて頂いた。学芸員としての仕事・進むべき道を確認したのである。この貴重な経験がその後の十九年間の私の学芸員としての歩む糧となったことは言うまでもない。

その後、平成5年「倭国展」、7年「音の考古－音具と鳴器の世界」、9年「古代びとの顔－面形の世界－」、13年の「器が語る装いの美－漆に彩られた縄文の美－」を開催し、いま思えばどの展示も全国を駆け巡り、博物館、埋蔵文化財センター、個人収集家などを訪ね借用をお願いし、特に院友との連携、これは私にとって何よりも心強く、信頼関係を構築させていただいたのである。

学芸員として何をすべきか、大変難しい内容であるが、地方の博物館の学芸員としては、常に全国の博物館での展示を実見し、展示資料・展示手法・会場構成などを調査することに心がけたのである。多くの展示を見学することによって資料の存在、地域性をどう生かしているかを把握し、担当学芸員とのコミュニケーションを持つことも心がけた。さらに展示に必要不可欠な立案・構成にも一工夫を常に考慮し、展示手法によっていかに資料を生かすか、展観頂いた方々に展示の意図をいかに理解して頂くかを考え、会場でのトークを実施し、展示の補足と各資料が何を語ろうとしているのか、図録・パネル等では表現できない部分の補足として、会場内外でのディスカッションを実施した。

展示資料はこれまで収集した資料を常に活用し、県内の方々がなかなか実見することの出来ない他県の資料を展示し、比較検討することを考慮し、意見交換の場とし、またそれまで県内で知られていない資料の発掘・収集・研究をも展観し通し進めた。「ネーミング」「ポスター」等の存在は展示構成には必要不可欠な一要素でもあり、

心血を注いだ。

退職し、現在の博物館の置かれている状況を鑑みると、行政という組織の中で構成され、展示を実施すれば展示内容はさておき、入館者数によって評価され、自らの研究成果を基にした展示構成・立案では無く、その後の研究すら継続して行わないのが現状ではと思われるのである。恩師加藤有次先生の著書「和敬博愛」の中でくわが国の学芸員は、今日の博物館社会では身分上あるいは行政上からみてきわめて特異な位置に置かれている。したがって、それが学芸員の養成の問題にも関係してくるのである。日本の学芸員は、博物館のもつ性格上から単なる研究者のみであってはならず、その立派な研究を媒介として教育活動のでき得る人材でなければならない」と記している。今まさに博物館の置かれておる状況ではないだろうか。

昨今博物館と学校教育、社会教育との連携がしきりに問われ、各種講座、あるいは子供を対象とした移動博物館、出前授業等が今日実施されているが、これらもややもすると教育活動の一環・一助ではなく、単なる実績作りで実施している事も事実なのである。

私も学芸員実習、小・中・高校での出前講座、大学での講義、生涯学習センター、公民館等での講座を実施したが、資料は常に実資料を持参し、実見させ併せて博物館という施設での啓蒙活動・教育活動に対しての理解と協力、博物館の存在・意義を理解していただく事を進めたのである。



ギャラリートーク

巨大な野外博物館への挑戦 吉野ヶ里遺跡の発掘調査と整備

佐賀県教育庁 社会教育・文化財課 参事

七田 忠昭 (しちだ ただあき) 83期史



佐賀県の東部、神埼市と神埼郡吉野ヶ里町にまたがる丘陵の上に、96棟の復元建物が建ち並び、多くの来園者で賑わいを見せている。国営吉野ヶ里歴史公園として等身大に整備された弥生時代の吉野ヶ里環壕集落である。

大学を卒業し、佐賀県教育委員会の文化財担当部局で勤務して35年になるが、そのうち昭和61年から22年間に吉野ヶ里遺跡発掘調査の現場責任者として現地で費やした。吉野ヶ里遺跡を取り巻く状況は、平成元年2月23日の大報道以来大きく変化した。同年3月7日には知事の保存表明、5月連休明けの以降の埋戻しと仮整備、平成4年からの国営公園の整備基本構想、基本設計、各地域の復元基本設計と実施設計、そして、復元工事へと進展した公園事業に、発掘成果を最大限に生かすべく発掘情報の整理・分析を超特急でこなしてきた。発掘開始から整備完了までの苦しかった思い出も、来園者の方々の喜ぶ姿を見るにつけ楽しい思い出になった。

この間、悩み続けたことは、整備の目的、つまり、考古学の目的についてであった。吉野ヶ里歴史公園の場合は、同時期に存在した遺構群の中から同時に存在したらしい遺構すべてを選択して、地下に保存された遺構の直上に実物大施設を総合的に復元するといった国内で例のない整備手法をとった。原始古代の各種施設は当時の状況や構造が明らかにされるまでは安易に復元をすべきでないという意見や、実物大の復元整備に対する批判的な意見も多いが、そうであれば、実物大の総合的復元や、その景観の中で当時を想像することが将来に渡って不可能となる。整備された吉野ヶ里歴史公園には、国内外から年間約60万人が訪れているが、この来園者と公園設置者、また地域が共に利益を得ることができる公園として発展する必要がある。

國學院で学んだ父忠志(46期師)は、昭和16年、ビルマへの出征直前に『歴史』(第16巻第4号)に「日本考古学の反省」と題し、「考古学のための考古学から我々は国民のための考古学へと本来あるべき姿に還さねばならぬ」と述べ、復員後の昭和25年地元佐賀の

『郷土研究』(創刊号)に「郷土の歴史的研究の重要性とその方法に就いて」と題し、「現代を正しく打開し、自らの生活を幸福に、未来を正しく建設していくためには過去を正しく知る事の如何に重大にして、価値あるものであるか、そして歴史によって裏づけられ、根拠づけられているもの程、強さを持ち、力を持っている事、過去は決して単なる過去ではない事が判るであろう」と考古学の意義を述べた。

遺跡など埋蔵文化財は、教育素材としてのみではなく、地域特性を端的に示すものとして、今や地域経済にとって重要な産業・観光資源として認識されてきた。国民や地域住民の福祉の一環として、国家や地域活性化の素材として、また、地域の人々が自身の足元の歴史を知り誇りや勇気をもつ素材として整備・活用すべきものではないかと考える。

佐賀県に奉職して、あっという間に来年度いっぱいまで退職を迎える。県内4カ所の博物館施設での学芸員を経験することはなかったが、遺物の調査や保管・保存処理、韓国国立中央博物館での日韓共催特別展「吉野ヶ里展」など多数の展覧会や、各種講演・シンポジウムによる地域への広報、夜間・土日の研究など、博物館学芸員と同様な仕事をこなしてきた。学芸員は、専門を生かした形で、もっと地域の中に出て、「歴史によって裏づけられ、根拠づけられているもの程、強さを持っている」ことを地域の人々に伝えることによって、地域活性化に貢献することこそ最大の役割だと考えている。



吉野ヶ里復元集落

最初で最後の特別展示 『古代祭祀の世界』展を企画して

兵庫県立考古博物館調査課長

大平 茂 (おおひら しげる) 84期史・88期博前史



はじめに

院友学芸員並びに学芸員を目指す在学生の皆様今日は。私の役所人生も、残り僅かになってきました。初めは、兵庫県教育委員会が行う発掘調査。次いで、埋蔵文化財の市町指導と保護行政。最後が新設された考古博物館での、これまで調査・整理してきた考古資料を活用する展示の担当です。考古学を飯の種とする私には誠に恵まれた日々で、その間に博士学位も取得できました。小稿では博物館学研究室の依頼に基づき、学芸課時代に企画した特別展「古代祭祀の世界」の活動を紹介したいと思います。

特別展の趣旨・目的

各地で発掘された考古資料の中には、「祭祀遺物」と呼ばれるまつりの道具(各種の模造品)が数多く存在します。これら遺物の変遷を「継承と断絶の視点」で捉えると、この背景に当時の社会や国家が選んだ精神世界が見え隠れしてくるのです。

「展示の趣旨は、社会や国家が前時代の何を受け継ぎ、何を否定したのかを明らかにすること。」

その際に、基本となるのが祭祀遺物の推移(型式学的変遷)でした。人工物である以上、祭祀遺物も出現・発達・盛行・衰退という時間軸の流れを持っています。この流れに逆らい発達途中で終了したものがあれば、何がしかの原因・社会的変化があったと理解できる訳です。

こうした考え方で、原始・古代の祭祀遺物を祭祀の通史として概観できるよう工夫してみました。

展示資料の選択・借用

展示資料の中で柱に据えたのが、福岡県の宗像・沖ノ島祭祀遺跡の出土品(国宝、宗像大社所蔵)です。12万点余りともされる祭祀遺物(奉献品)は、銅鏡・玉類・武器に加え、朝鮮半島からの豪華な金属製品、西域系のガラス碗などがあり、まさに「海の正倉院」と呼ばれるにふさわしいものばかりです。

しかし、私はこの遺跡の特徴が個々の祭祀遺物ではなく、長期間に亘る祭祀の場の変遷と祭祀具の変化にあり、これが明らかにされた遺跡であることを評価したのです。

そして、この特展に絶対欠かせないものとして宗像大社の担当者をお願いしたところ、堤禰宜は借用依頼に伺うのが遅かったにも関わらず、高向宮司に諮り快く承諾

いただきました。院友だったことが、幸いしたのでしょう。

もう一つの柱は、都城遺跡出土の資料。こちらの方は、借用先が公立の博物館関係と安心していたら、奈文研他でダブルブッキングです。しかし、これまた運良く各担当者と旧知の間柄だったので、借用予定のリストをいただき調整ができました。全く、冷や汗の掻き通しです。

展示は、これに兵庫県内出土の資料を加えて総点数269点、70頁の展示図録も刊行できました。

特別展示等の観覧者数

50日の展示期間中には、計13,647名の観覧者がありました。そして、辰巳和弘氏・弓場紀知氏・水野正好氏と私の講演会に計472名の聴講者、「ミニ茅の輪作り」と「銅鐸破壊実験」のイベントでは計217名の参加者がありました。ご来館いただきました方々には、厚くお礼申し上げます。

おわりに

当館ではイベントを行う週末は、お蔭さまで小学生以下の子どもとその家族の方々と盛況を呈しています。

それに対し、特別展・企画展はもっと本物・良い物を見せようと欲張るのですが、観覧者数は今一つ伸びていません。常設展示との比較では、家族連れが少なく個人の考古学愛好者が主体という客層の違いも認められます。入館者増を図るには、経費増よりもまず周知(広報)に工夫をすべきと考えます。また、内容を充実させるにも、最低2年間の準備期間は設けたいものです。



特別展に伴う講演会『古代祭祀の継承と断絶』風景

学芸員の喜び

佐倉市立美術館館長

前川 公秀 (まえかわ まさひで) 81期史



「博物館は「もの」があって、博物館である」。この言葉は、恩師加藤有次先生の口癖であった。学生時代から、それこそ耳にたこができるほど聞かされた。

博物館とは、「もの」を通して過去と現在がコミュニケーションする場所であると思う。「もの」は、人々の生活の営みから生まれてきたものであり、人を取り囲む環境の中に存在していたものである。「もの」を調査研究し、その成果のもとに提示し、コミュニケーションを活発化させるのが学芸員の役割である、と私は考えている。私が長く携わってきた美術館では、「もの」は主に油彩画、彫刻などの作品であるが、まさに人々の創造や思想、あるいは生き方などを反映したものであると言える。その作品が、どのような時代的、社会的な背景から生まれ、人が何を考え、何を主張し、何を表現しようとしたのか、それを様々な方法で提示することで、鑑賞する現在の人は、過去の作家との距離を縮め、理解し、共感することが可能になる。

しかし、最近の若い学芸員たちは、「もの」と直接触れることが少なくなってきたように思われる。調査や研究も「もの」から外れ、大学などの研究者とあまり変わりがなくなったのでは、と危惧を感じている。私が美術館の学芸員になった頃、当時活躍されていた大先輩から、「研究者と学芸員の本質的な違いは何か」という質問を投げかけられたことがあった。その答えは、研究者は美術館に展示されている作品をガラス越しに、しかも展示されている状態でしか見ることでしかない。しかし、学芸員は、ガラスもなく直接に見ることができ、必要ならば手に取り、作品をひっくり返し、その裏も見ることができる、と言うものであった。だからこそ、「学芸員は、作品を取り扱うことを避けてはならない。それが学芸員の仕事であり、学芸員に与えられた特権である」と。まさに、学芸員の仕事を端的に表現した言葉であると思う。

たとえば長い年月を経た油彩画は、表面は美しい表情を保っていても、カンバスの裏を見ると、その作品が過

ごしてきた環境を知ることができる。あるいは木枠に貼られた展覧会シールや所蔵者のシールなどから、どのような展覧会に出品されたとか、誰が所有していたのかとか、いろいろな情報を得ることができる。さらに直接手で持つことにより、作家の温もりすら感じることができる。

最近の美術館では、作業の分担化が進んでいる。特に、作品の取り扱い、もはや学芸員の仕事ではなく、美術輸送業者の専門スタッフに任せることが多い。作品の展示などの際、若い学芸員たちは、専門スタッフの作業を傍観している姿をよく見かけるようになった。しかし、もったいない話である。作品に触れることのできるという特権を、自ら放棄することはない。それがたとえば世界の名作であったとしても、学芸員はガラス越しではなく、直接観察することができ、手に取って感じることもできるのである。

そのためには、しっかりとした取り扱いの技術を身に付けなくてはならない。大学の授業のなかだけで、取り扱いの技術を身に付けることは、そんなに簡単なことではないであろう。しかし、常に「もの」と真摯に向き合い、愛情を持って、積極的にアプローチしていく姿勢を身に付けてほしい。博物館において、「もの」を扱うのは学芸員の仕事であり、それが喜びであることを忘れないでほしいと思う。



作品のチェック

まちづくり・ひとづくり 地域に貢献できる博物館を 松本まると博物館の実践から



松本市立博物館 館長補佐・学芸員

窪田 雅之（くぼた まさゆき） 89期史

「これからは博物館の時代です。松本で頑張ってください」。故加藤有次先生から激励の言葉をいただき、故郷にもどってから早いもので30年近い月日が…。現在、二度目の博物館勤務をしています。

松本市立博物館（本館、ほかに14の付属施設）の前身は、明治39年（1906）9月21日に開館した〈明治三十七、八年戦役記念館〉です。松本市制施行が翌40年ですから、市の誕生よりも博物館の方が早いという珍しい事例です。以後百余年にわたり、学都・松本の屋台骨となり松本地方の文化向上に寄与し現在に至っています。いっぽう、私には同じ社会教育施設である図書館・公民館と比べると、多くの市民とのかかわりのなかで、博物館は市民社会と遊離した一面があると感じられました。本市の博物館の始まりは明治後期ですが、逆に古くから在ることが、博物館と市民との良い意味での緊張感を薄れさせていたかもしれません。

そんななか、私が提案したのが「松本まると博物館」（以下「まる博」）構想です。これは、市域全体を屋根のない博物館としてとらえ、エコミュージアム的な手法を援用して平成12年に松本市が策定したものです。そこには従来の博物館がなかなか成し得なかった、博物館が地域振興に貢献し、博物館を核としたまちづくり、ひとづくりも述べられています。観光志向も本市の歴史をたど

ると大切ですが、地域に根ざし、市民や利用者に親しまれる博物館づくりがこの構想の骨格です。いくつかの実践例を紹介してみますと、①松本市「博物館の日」制定、②まる博コーナーの設置、まる博マップ・ガイドブックの作成・頒布、③地域との連携事業、④市民学芸員養成講座の開講、⑤まる博ポータルサイトの開設、⑥学都松本・博物館「勸館楽学」対談、⑦基幹博物館整備準備、等々があげられます。詳細は省きますが、遅々とした歩みでも博物館は変わりつつあります。

現在、博物館は松本という地域社会のなかで、結衆の原点としての役割を果たすこと、文化の殿堂から市民フォーラムの場へと変わることが求められています。また数字がすべてではありませんが利用者がなくては金喰い虫といわれてしまいます。市民・利用者から育てられ共に歩むことが、博物館・職員を活かし、博物館が変わる、と私は思います。

不真面目な学生であった私を支えてくれたのは、博物館業界（？）で活躍する院友諸先輩方のご指導、國學院の充実した博物館学課程でした。博物館を巡る環境は依然として厳しいものがありますが、改めて感謝するとともに、院友学芸員の皆さん（私も含め）に次の言葉を贈ります。「顔晴れ（ガンバレ）！ 学芸員」。



市民学芸員養成講座



鯉街道推進協議会での講演（富山市）

学芸員の商品試作

霊山歴史館学芸課長

木村 幸比古 (きむら さちひこ) 80期神



私の勤務する京都の霊山歴史館は幕末維新で殉難した志士たちが眠る霊山墓地の麓に昭和45年に開館した。霊山は龍馬はじめ中岡慎太郎、木戸孝允らの墓碑があり、最近の歴女ブームと大河ドラマ「龍馬伝」の影響もあり入館者が増えている。

入館者の増加に伴いミュージアムショップのオリジナルグッズ充実もおのずと求められる。私がオリジナルグッズに興味をおぼえたのは、平成10年度NHK大河ドラマ「徳川慶喜」展示委員に就任した際、巡回館でのグッズの意見を求められた。業者の持ち込みグッズだけでなく委員の意見を反映してグッズの試作するものだった。このときは、勝海舟の史料から一筆便箋を作った。平成16年度「新選組」は、新選組の土方歳三が行商した石田散薬をもじって石田散飴や近藤勇の稽古着からTシャツを作ったが、ユニークさも手伝って好評だった。

今回の「龍馬伝」はお龍が龍馬からもらった帯留めの携帯ストラップも話題をよんでいる。龍馬の活躍した地域では、地元の食品をもって多く商品化している。

「龍馬伝700冊の関係本」

龍馬の関係本はドラマの龍馬役の福山雅治さん、岩崎弥太郎役の香川照之さんの話題性から700冊を超える出版をされたが、どれも同じようなビジュアル本ばかりで40年前の司馬文学「竜馬がゆく」も現代では古典となり、どの書籍も店頭に並びきらず売れなかった。そんな中でも、J R京都駅の空中径路で開催の写真展「幕末を活きた人物伝108」は入場無料もあって好評であった。同展の監修を担当したが、人物紹介に人物のキャチコピーをつけエピソードでまとめたところ、見学者からの要望もあって京都駅ビルでは、46枚カードと手ぬぐいつき1200円(税込)で販売、話題となった。

「歴史を商品化」

私は、5、6年前からミュージアムグッズの試作に本格的に取り組んだ。名古屋の業者から戦国と幕末の卓上カレンダーの製作で、戦国は小和田哲男静岡大学名誉教授、幕末は私が担当した。たちまちヒット商品となり関連博物館、美術館、銀行、企業などでも扱われ戦国ブームか

ら類似商品もでたほどであった。

特に、人物の名言にこだわり自著「龍馬語録」(PHP)、「幕末維新珠玉の一言」(淡交社)、「幕末維新・歴史を揺るがした英傑たちの100の決断」(ナガオカ文庫)から万年カレンダー、幕末手帳、トランプに英傑の名言を取り入れ、人生観を商品化したことがヒット商品に繋がった。最近の歴史愛好家は、家紋に興味をもつところから龍馬土方、近藤らの家紋入りをデザイン化したカレー皿、小皿を美濃焼の作家に依頼し製作したが好評だった。ヒット商品は、幕末の名言携帯ストラップ付で、サークルK限定商品のサントリーモルツプレミアムは6月末までに完売した。

また、私は高知県観光特使を務めていることから龍馬の名言を現代語訳つきの「高知ゆずガム」ロッチ(1億個)をつくりコンビニなどで発売している。

今秋にはカシオの腕時計Gショック龍馬(1000限定)で時計の裏には龍馬の書判(花押)を刻印した。以前にも新選組版の監修をしたことがあったが今回もネット販売で龍馬人気から即完売が予測されるが、追加発売はしない。

今後も幕末ブームが続き映画「武士の家計簿」「桜田門外ノ変」など話題作からグッズも注目されるだろう。学芸員も積極的に関連グッズをつくれれば、一般商品として店頭で並ぶ日があると思う。



木村グッズ

琴平山再生計画

金刀比羅宮宝物館 榎宜

琴陵 泰裕 (ことおか やすひろ) 111期神



金刀比羅宮では平成12年より、美術家の田窪恭治氏(現・同宮文化顧問)を招聘して「信仰」と「文化」のさらなる融合を意図した「琴平山再生計画」を進めています。この計画は平成16年に斎行されました『平成の大遷座祭』を機に“21世紀のニューこんぴらさん”をスローガンに立ち上げられたもので、御本殿をはじめとした社殿建造物、書院、宝物館などの文化的建造物を整備し、当宮が鎮座する琴平山を「信仰」と「文化」の一大拠点、発信地として活性化させるものです。

その第一弾が表書院のリニューアルでした。表書院は金毘羅大権現に奉仕する別当金光院の客殿として万治年間(1658~1661)に建立され、諸儀式や参詣した貴顕の応接等に使われました。7室からなり、上段の間、二の間、そして南の3室(七賢の間・虎の間・鶴の間)には江戸時代を代表する円山応挙の障壁画が残されています。しかし、明治34年に「七賢の間」の面部を墨で塗りつぶされる事件が発生して以来、円山応挙の描いた5部屋すべてに金網と鉄格子が取り付けられました。これらは防犯上やむなく取り付けられたものですが、視界は遮られ美術作品が鑑賞しづらくなってしまいました。

そこで平成14年に金網と鉄格子を取り除き、代わりに

紫外線防止加工の透明ガラスを組み込みました。さらに室内に美術品用の照明を設置しました。その結果は歴然たるもので百年の時を経て応挙の描いた「鶴」や「虎」の姿が見違える程元気になって甦りました。

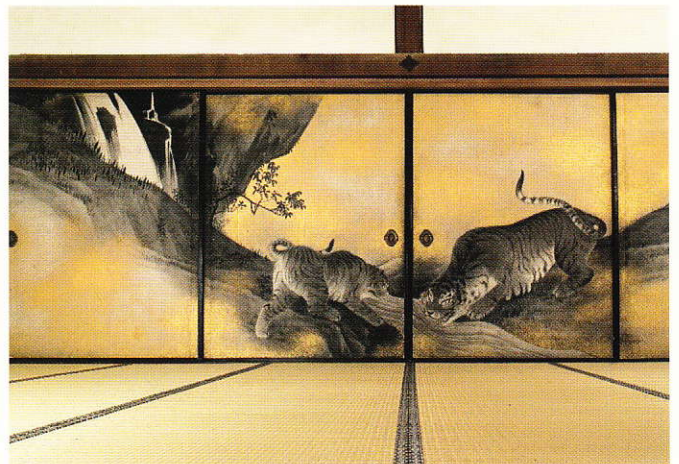
またこれまで非公開だった奥書院も『平成の大遷座祭』の特別展として実に125年ぶりに公開されることとなりました。奥書院は表書院とほぼ同時期に建立された別当金光院の私的施設で伊藤若冲、岸岱の障壁画が残されています。

平成19年、東京上野の東京藝術大学美術館を皮切りに「金刀比羅宮書院の美」巡回展がスタートしました。これは当宮の表書院や奥書院などに描かれている円山応挙、伊藤若冲、岸岱の障壁画を可能な限り移設して現地で書院空間を再現するというコンセプトで、金刀比羅宮(現地展)、三重県立美術館、フランス国立ギメ東洋美術館を巡回し、おかげさまで大変な反響を得ました。特に平成20年の海外出展は、当宮初の快挙であり「琴平山再生計画」の大きなターニングポイントとなりました。

「琴平山再生計画」も本年で11年目を迎えます。さらなる活性化に向けて神社を挙げて取り組んでいきたいと思っています。



奥書院上段の間「花丸図」 伊藤若冲



表書院虎の間「遊虎図」 円山応挙

家具の博物館から

(財) 家具の博物館主任学芸員

齊藤 雅士 (さいとう まさし) 85期法



私の勤務する家具の博物館は、高度経済成長が終わろうとする昭和47年に、戦後の家具産業の発展を記念するかのように誕生した家具専門の博物館です。当初から土地も建物も持たずに東京都中央区晴海のJICビル2階を借りて運営してきましたが、平成16年に諸事情により立ち退きを余儀なくされました。突然のことではありましたが、創設者の縁から昭島市のフランスベッド東京工場の敷地内に移転し、博物館活動を続けることが出来ることとなり、今日に至っています。

開設以来、インテリア・デザインなどを学ぶ学生や家具業界人をはじめ、家具愛好家等には知られる施設となってはいましたが、趣味性の強い博物館でもありました。また、近年のわが国における家具産業の危機的な状況と同様に、当館も旧来のまま安穩としているわけにはいなくなっていました。そこで、移転を機に博物館活動のあり方を見直し、より地域に根ざした地域住民に愛される博物館を目指し、「18歳以下の入館者の無料化」、地元で活躍している家具工芸作家等を紹介する展覧会の開催、見るだけでなく資料に触れられる展示などを行っています。

当館は、全国の博物館の中でも規模の小さな博物館ですが、博物館の学芸員資格取得をめざす実務実習生を受け入れて指導を行っています。実務実習生の受け入れは、昭和59年に財団の某理事の依頼を受け、2名の学生を受け入れたのが始まりです。受け入れはその年だけのはずでしたが、なぜか実習指導を行ったことが他大学にも知られ、翌年からは複数の大学から同様の依頼を受け、実習生の指導を引き受けるようになりました。ここ数年は毎年10名程度の実習生を受け入れていますが、主に椅子

や筆筒などの家具資料の扱い方、資料の梱包方法などを中心に指導を行っています。ただ、この実習指導が適切なものかどうか、他の博物館施設での指導状況が判らないため悩ましい限りです。また、実習開始前のオリエンテーションで、一様に学生たちが学芸員として働けたらいいが、それは不可能だと諦めていることがとても残念です。ともかく、学生たちには、希望と勇気を持って夢の実現に向かって挑戦してもらいたいと願っています。

さて、私が当館に勤めることとなったのは加藤有次先生の紹介によるものです。今思い返せば、好きにやっていたと言われて気楽に引き受けたと反省しています。実際勤め始めてみれば、学芸員とは名ばかりで、雑芸員ならまだ良い方で、実際のところ雑用員ではないかと思えるほどでした。私が勤める以前に2人の学芸員が辞めているのですが、扱う資料が大きく重く扱い難く、人も金もないことなどから勤まらずに逃げ出したのが実情のようです。私も、家具の勉強はもとより、全てが暗中模索の手探りで、これでいいのかと思い悩み挫折しそうになることも多々ありました。何より自前の施設を持たないため、資料の維持管理が大変な問題で、これは今現在も解決できずにいます。何度となく投げ出したくなるのを思いとどまったのは、加藤先生にご無理を言って財団の理事に就いていただいていた為で、辞めるに辞められず、今日までだらだらと勤め続けてしまいました(加藤先生亡き後、青木豊先生に引き続き理事を引き受けていただいております。という訳でこの原稿を書くはめにもなったのですが)。ところで、いつのころからか、秋になると加藤先生宅にて財団の役員会を開くとともに、有山庵で懇親会を行い、奥様の手料理とともに先生自ら打たれた饅頭を食するのが慣例となっていました。数多い加藤先生の教え子の中でも、こんな贅沢を味わったのは私だけではないでしょうか。



「資料の梱包作業をする実習生」



「昭島市在住の藍染作家・形山榮依子氏の作品展の様子」

大学博物館の将来的役割の模索のなかで

久留米大学比較文化研究所客員教授

森 醇一郎（もり じゅんいちろう） 74期史



九州の大河「筑後川」の流れによって流域に形成された地理的環境は、中国大陸と朝鮮半島に近接することもあいまって多様な文化を生み、育んで特色ある歴史的景観をつくってきた。久留米大学はこの大河の流れの中で、開学以来80年の時を刻み、今日の大学キャンパスを形成している。久留米大学の開設は福岡県医学界の強い要望のもと「九州医学専門学校」として、昭和3年に開設され、戦後文系学部を合わせもつ大学として今日に至っている。久留米大学文系学部には独立した研究機関である「比較文化研究所」が組織されている。私は、34年間の公立博物館の勤務を終え、博物館実務の経験者として比較文化研究所の専任教授に迎えられたのを契機に、比較文化研究所内に大学博物館の設立を目的にした「地域博物館研究部会」の開設を提案した。

平成20年4月に開学80周年の節目を迎えたことから、記念事業の一環として「久留米大学総合博物館基本構想策定」の目的をもつようになり、地域博物館はその中の一つの施設とし、博物館建設の専門コンサルタントの協力をえて3年間で基本構想を策定した。その結果、大学博物館の設立目的と役割を「大学の総合的なデータバンク」としてその位置づけを明確にし、博物館を手段とした文化・広報活動の構築による大学の地域戦略の手段として不可欠な大学施設として、その必要性を説いてきた。そこから、①オープンキャンパスの常設化による大学情報の発信、②寄贈、寄託資料の受け入れによる積極的な文化・広報活動の導入、③文系及び医学系学部の博物館を整備することによりデータバンクの構築による創造的な人材の育成等が考えられるとした。このような大学総合博物館構想の構築と整備による結果として、国内外の学生の獲得のための吸引力の強化や創造的な人材の育成による大学総合評価の向上、さらには多様な人材の交流による学際的研究効果による大学力の向上に繋がるものであるとした。

「久留米大学総合博物館構想案」として、大学の発展過程から「文系博物館」と「医学系博物館」の2系統と大学博物館さらには大学周辺に点在する地域博物館の今後の管理・運営を担う博物館管理機構を設けて3系統とした。文系博物館には365日オープンキャンパスの役割

を持つ「開学80周年記念館」や博物館学講座と学芸員養成課程の実習や九州の地域博物館の情報を提供する「九州の博物館情報館」等が、医学系博物館には人々の生命に関係する総合展示として「生命の科学館」や医学部の80年の歴史と現在の教育課程を示す「医学部講座科目館」等が考えられる。

このように、久留米大学総合博物館は文系が5館（室）と医学系5館（室）から構成される構想案であるが、部分的に選択した館（やかた）あるいは取り組みやすい施設から着手してもよい。また短期間で全てを完成させるのではなく、10年から20年という長期計画の中で目標を達成してもよいのである。

現在、九州各県ごとに組織されている博物館協会あるいは博物館協議会に加盟している博物館等文化施設は392館あり、その多くを公立博物館が占めている現状から行政改革による市町村合併や道州制度の導入計画は、将来的に文化施設の統廃合や再配置計画にまで及ぶことは必至と思われる。このような社会構造の基礎的構成要因の大きな変化の中で、はたして九州博物館界は将来的にどのような対応をするのかまったく見えてこない。そこで早く多様な議論を開始し、九州博物館界の将来像を描いておく必要があるのではないだろうか。そこに大学と大学博物館の将来的に果たす役割が生じてくるのではと考えるし、博物館学芸員養成課程をもつ専門的な立場から積極的な発言を行うべきではなかろうか。



久留米大学 本部

学芸員を志す皆さんへ 全盲の学芸員実習生をとおして

神奈川県立歴史博物館学芸員

片柳 圭輔 (かたやなぎ けいすけ) 116期哲・博士課程前期在籍中



学芸員を目指している皆さんは、「全盲の学芸員実習生」という言葉からどのような印象を受けるでしょうか？平成22年度、神奈川県立歴史博物館の学芸員実習では全盲の学生を1名受け入れました。本稿では、私の担当する業務の紹介と、実習生の行った実習の一部を、個人的な感想を交えながら述べさせていただきます。

私は、平成22年4月より当館の非常勤学芸員として勤務しています。業務内容は子ども向け事業の企画・立案、博物館だよりの編集、学芸員実習の受入・実施担当といった仕事を担当しています。

学芸員実習は教育普及関連を中心とした前期実習と、資料の取り扱いを行う後期実習の計7日間で行われました。その実習の一つに梱包材の作成があり、薄葉紙、綿、セロテープを用いて、各班3～4人で作業を行いました。

全盲の学生を含む班では、お互いにコミュニケーションを取りながら作業していました。セロテープを貼りつ

ける際に「薄葉紙押さえたよ」、「セロテープ貼るよ」、「もう少し左だね」と、お互いに声を掛けて円滑に進めていました。完成した梱包材は他の班が作成したものと同じ出来栄でした。私はこの作業を側で見ていて、全盲であっても周囲の協力によって問題なく作業が行えるのだと実感しました。又、本実習を通して「モノが見えない」ことについて深く考えさせられたと思います。

勤務初年度より、学芸員実習を担当しましたが、後輩の方々にお伝えしたいのは「一つの仕事」を大切にしたいということです。初めての仕事や、地味な仕事、多くの人が関わる仕事など、様々な仕事があります。

しかし、例えどのような仕事であっても自ら何かを学びとろうとする姿勢で取り組むことによって、多くのことを吸収できるのではないかと思います。私自身もそのことを念頭に置き、日々精進していきたいと思っています。

学芸員を目指す皆様へ 今までのキャリアを振り返って

野田市郷土博物館・市民会館学芸員

大貫 洋介 (おおぬき ようすけ) 116期史・118期博前



平成22年の4月より千葉県の野田市郷土博物館・市民会館で学芸員として勤務しています。野田市郷土博物館は昭和34年に開館した千葉県で最も古い登録博物館であり、平成19年からは指定管理者制度の導入により、キャリアデザインの拠点としてNPO法人野田文化広場によって管理、運営されています。私もNPO法人の職員として博物館業務に携わっています。

学芸員になるまでの私のキャリアを振り返ると、2年間の非常勤職員時代の経験がとても重要であったと思います。私は大学院進学後、川口市立文化財センターで調査員を2年間、野田市郷土博物館で補助員を半年ほど勤めました。博物館の現場では実習とは異なる様々なスキルが求められます。例えば、実習では基本的な資料の扱い方、調査、保存の方法を学ぶことができますが、多数の資料を取り扱い、調査以外にも様々な業務をこなさなければならぬ学芸員職においては、資料1点にかけら

れる時間には限りがあります。こうした条件下で、その資料の調査にどの程度の時間がかかるのか、限られた時間内で何を情報として残すべきかをその資料、コレクションの特性と館の趣旨、目的を照らし合わせた上で判断しなければなりません。こうしたことは博物館の現場に出て、多数の資料を扱う中で身につけることができます。

これから学芸員を目指す皆様は、非常勤、ボランティア等でも積極的に博物館の現場に出るべきだと思います。部分的にでも博物館業務の経験を積むことにより、自分が博物館で何ができるかを知ることができます。これは、ある程度の戦力が求められる学芸員試験において、とても重要なアピールポイントになります。

全国の博物館に院友学芸員をもち、情報の集まりやすい國學院大学では、早い段階から現場に出ることも可能です。学業や研究との両立も考慮しつつ、自分になりたい学芸員へのキャリアをデザインしてみてください。

新しいミュージアムを目指して

ディスカバリーミュージアム 学芸員

青 木 かおり (あおき かおり) 118期史



「ディスカバリーミュージアム」この名前に聞き覚えがある方はまだ少ないと思います。ディスカバリーミュージアムは国内空港初のミュージアムとして平成22年10月に羽田空港にオープン致しました。当ミュージアムのコンセプトは「おもてなし」です。空港をご利用される国内外のお客様がくつろげるよう、ラウンジ風にソファを設置し展示品と向き合っていただけの空間となっております。そして最大の特徴「お客様主観の展示」です。つまり、展示品には一切キャプションを置いておりません。更に展示品の時代背景などを書いた



解説付きの目録をお客様一人ひとりにお渡しをしております。なぜなら、お客様のペースで展示品と向き合って頂きたい、そ

して展示品の持つ歴史、素晴らしさなどをお客様自身で感じ、発見して頂きたい、という思いでいるからです。

オープンしたばかりのミュージアムなので課題は尽きることがありません。又、私自身、学芸員ではありますが今は史料との直接的な関わりは少なく、現在はミュージアムショップや解説・ご案内・監視などの管理業務が中心となっております。管理業務も勿論大切な仕事ではありますが、やはり学芸員と名乗っている以上は、いつかは史料の取り扱いや企画に携わりたいと思っております。そしてそのためには今自分は何をすべきか、という自問自答を常に持ち、積極的に実行するという心持ちで日々の業務に努めております。

若輩の身ではありますが、諸先輩方のご指導のもと、今までにない新しいミュージアムを作っていきたいです。そして、ディスカバリーミュージアムをきっかけに全国の博物館・美術館にお客様が足を運んでくださるようなミュージアムの運営を目指したいと考えております。

駆け出しの“院友学芸員”より

靖國神社遊就館 嘱託職員

田 中 みずき (たなか みずき) 117期神



私が奉職致しました靖國神社遊就館は明治15年に開館した歴史ある展示施設です。靖國神社の御祭神である戦歿者の方々が遺された品々や関わりのある史資料を展示しています。遊就館の収蔵品のジャンルは幅広く、明治維新期から大東亜戦争までの戦歿者の方々の御遺書や愛用されていた品々等の御遺品の類、高橋由一作『甲冑』に代表される絵画をはじめとする美術品の類、古代から近代までの刀剣や甲冑等を含む武具のコレクション、零式艦上戦闘機52型をはじめとする大型兵器の等、多種多様な品々が収蔵されています。

高校生の頃より靖國神社への奉職が希望であった私は、神道を学ぶ為に國學院大學に入学しました。小学生の頃から文化財を守る仕事をしたいと思っていた事もあり、次第に遊就館で奉仕したいと思うようになり、少しでも為になるようにと学芸員課程を取りました。

決してよく出来た学生ではありませんでしたので、前

述したような多くの収蔵品と対峙して、不真面目な学生時代を嘆く事もあります。卒業後、すぐに嘱託職員として奉職となりましたので、知識だけではなく技術の面でも素人であり、卒業後の今でも先生方や先輩方に御指導頂く事があります。学生の皆さんは、在学中、ひとつひとつの授業を大切に受ける事は勿論、先生方や諸先輩との交流も大切にしておくべきだと思います。在学生へ私が出来たアドバイスはこれだけです。

私には、奉仕するにあたり大切にしているものが3つあります。御祭神への崇敬の気持ち、開館から現在に至るまで遊就館に携わった先人達への尊敬の気持ち、そして、最後のひとつは人や物との御縁です。私は遊就館で奉仕出来る事を心より幸福だと思い、心より感謝しています。今後も“院友学芸員”として恥じぬよう奉仕していきたいと思っています。

学芸員を目指す皆様へ

サントリーパブリシティサービス株式会社

菅野 響美 (かんの きよみ) 118期史



2010年3月に文学部史学科を卒業後、一般企業に就職しました。私は学芸員ではありませんが、何故学芸員を目指したか、企業に就職したのか、そして今後の展望について書きたいと思います。

私が学芸員を目指した理由は2点あります。1点目は遺跡・資料を守りたかったからです。大学入学当初、奈良県明日香村のキトラ古墳壁画等の遺跡や資料が人の手によって傷つき失われていることが問題になっていました。資料は、何百年何千年の時間をかけて伝わってきたものです。大切に守り、更に後世にも残す義務があると思います。2点目は、資料を保管している博物館等を守りたいからです。学部授業『博物館実習Ⅲ』で、財政難のため貴重な資料を最新鋭の他館に引き渡し、廃れて行く資料館の姿を目の当たりにしました。今まで資料を守っていた博物館等が無くなっていくのは大きな問題です。資料は、その土地に残してこそ価値があると思うの

です。就職活動中、私は大学院に進学し学芸員を目指すか、企業に就職するか悩みましたが、金銭的な問題等もあり、就職の道を選びました。

私はサントリーパブリシティサービス(株)に就職し、現在は山梨県のサントリー白州蒸溜所のご案内係として工場広報の業務に就いています。学芸員ではありませんが、将来的には文化施設に携わる業務に就きたいと思っています。

学芸員を目指す方々。先生方や諸先輩が、「学芸員の募集枠は少なく、就職はなかなか難しい」と仰っています。確かに学芸員は難しいかもしれませんが、道は一つではありません。少し視野を広げてみれば博物館、美術館、資料を守り携われる仕事は多くあるのです。是非、志を高く、自分のやりたいことを実現出来る職業、学芸員を目指して下さい。

学芸員を目指す皆様へ

講師の仕事を通して

昭和音楽大学講師

高木 愛子 (たかぎ あいこ) 博士課程後期在籍中



私は、2010年4月より昭和音楽大学で学芸員資格課程の非常勤講師として勤務しております。

落合先生からご紹介いただいた講師の話は、教職を考えていなかった私にとって、思いがけないことでした。教育実習を受けておらず、TAの経験もない私に講師を務まるのか不安でいっぱいでしたが、青木先生と落合先生から後押しをいただき、この世界に飛び込む決意をいたしました。

これまで研究発表など人前で話す機会はありましたが、教壇に立つたび「教える」ということの違いを痛感させられております。学生が興味を持てるよう説明するには、教える内容以上の知識と身近な例が必要と考え、関連書籍を読み漁り、博物館における具体例などを集める日々です。一方で、学部修士で学んだ建築の知識や、非常勤職員として勤務している国立科学博物館での業務経験なども取り入れながら、私が教えることのできる授業内容とは何か試行錯誤を続けております。

授業では毎回、教える経験が浅い分、熱意は強く持つよう心掛けております。学生による授業評価アンケート結果では、反省すべき点や改善すべき点も多々ありましたが、

身近な例で分かりやすかった、先生の頑張っている姿が好印象だったなど、私の想いは伝わっているようです。

不安だらけで手探り状態の出発ではありましたが、今では学生達とも次第に打ち解け、質問をしにきてくれたり、授業が面白いという声を聞くのが何よりの励みです。自分の授業を通して学生達が博物館と学芸員に興味を持ってくれることに、遣り甲斐も感じるようになりました。今後どのような仕事に就くとしても、講師としての経験は将来必ず私の力になると確信しております。また教職の道も積極的に考えていきたいと思っています。

これから学芸員を目指す皆様も、過去の経験がどのような形で将来に繋がるかは未知数です。教職も含め様々な可能性に対し、恐れずにチャレンジしてってください。



國學院大學博物館学教員紹介

大学 院 担 当 教 員	青木豊（國學院大學） 資料保存展示論研究・特殊研究 博物館概論 博物館実習Ⅲ・Ⅳ 博物館資料論Ⅰ・Ⅲ	落合知子（國學院大學） 地域博物館論研究・特殊研究 博物館学専門実習・特殊実習 博物館実習Ⅲ・Ⅳ	小川直之（國學院大學） 博物館資料論特論BⅠ（民俗）	鷹野光行 博物館史特論 お茶の水女子大学 教授
	矢島國雄 欧米博物館史特論 明治大学 教授	池田宏 博物館資料論特論AⅡ（有職） 東京国立博物館 上席研究員	原田一敏 博物館資料論特論AⅠ（金工） 博物館実習Ⅳ 東京芸術大学 教授	岩崎均史 博物館資料論特論BⅡ（絵画） たばこと塩の博物館 主任学芸員
	井上洋一 博物館経営特論 東京国立博物館 学芸企画部企画課長	栗原祐司 博物館関係法規特論 文化庁文化財部 美術学芸課長	駒見和夫 博物館教育活動特論 和洋女子大学 教授	石川貴敏 展示工学特論 丹青研究所 部長
学 部 担 当 教 員	内川隆志（國學院大學） 博物館実習Ⅰ 伝統文化リサーチ センター 准教授	高橋信裕 社会視聴覚教育Ⅱ 文化環境研究所 所長	樋口政則 博物館実習Ⅱ 江戸川区郷土資料室 学芸員	山田磯夫 博物館資料論Ⅱ 横浜美術大学 准教授
	杉山正司 博物館経営論 埼玉県立歴史と民俗の 博物館 学芸主幹	有元修一 博物館実習Ⅳ 目白大学 教授	石田武久 博物館実習Ⅰ・Ⅳ 博物館概論 儀礼文化学会事務局長	桒淵規彰 博物館資料論Ⅱ 博物館実習Ⅳ 神奈川県生涯学習文化財課
	粕谷崇 博物館情報論 白根記念渋谷区郷土博物 館・文学館 学芸員	野中優子（國學院大學） 博物館実習Ⅲ 博物館学研究室 助手	伊藤慎二（國學院大學） 博物館学教育研究情報 センター 助教	

※ 大学院授業、大学授業

平成23年度 大学院開講科目

科目名	単位	曜日	時限	時期	担当者	備考
論文指導実習	4	月・火	5・4	通年	青木豊 教授	
資料保存展示論研究・特殊研究	4	月	6	通年	青木豊 教授	
地域博物館論研究・特殊研究	4	火	6	通年	落合知子 准教授	
博物館史特論	2	木	5	後期	鷹野光行 講師	
博物館学史特論	2	月	7	前期	青木豊 教授	
欧米博物館史特論	2	水	6	後期	矢島國雄 講師	外書講読
博物館関係法規特論	2	土	2	前期	栗原祐司 講師	
博物館資料論特論AⅠ（金工）	2	金	3	後期	原田一敏 講師	
博物館資料論特論AⅡ（有職）	2	金	2	前期	池田宏 講師	
博物館資料論特論BⅠ（民俗）	2	火	3	前期	小川直之 教授	
博物館資料論特論BⅡ（絵画）	2	土	2	後期	岩崎均史 講師	
博物館経営特論	2	金	6	後期	井上洋一 講師	
博物館教育活動特論	2	木	5	前期	駒見和夫 講師	
展示工学特論	2	金	7	前期	石川貴敏 講師	
博物館学専門実習・特殊実習	4	木	6	通年	落合知子 准教授 内川隆志兼担准教授 (学内インターンシップ担当)	(前) 学術資料館等でのインターン シップ1単位、夏期集中授業学外実 習1単位を含む (後) 夏期集中授業・国内外インター ンシップ各1単位を含む